

いい時間

目 澤 恵美子

春の日差しは希望の光だなあ――。

私は思わず外に向って背伸びをした。なにしろ五ヶ月もの長い間、寒さに耐えていたのだ。寒冷地に住む者にとつては、やっと庭や畑のシーズンが来たと胸が躍る季節である。

いよいよ土を掘り起してみよう。春の訪れで柔らかくなった土は、黒くきらめいていた。春の仕事は、石灰をまいたり畝を立てたりしながら、土に十分な栄養分を施す。植物の生育を足す為の作業だ。そして自然の恩恵、ふりそぐ雨、さわやかな風、暖かな日の光は、地上の生きとし生ける者すべてに力を与える。

そんな恵みを受けた我家の庭では、春一番に雪割草がシャクナゲの下で仲間を増し、真っ白な姿を見せた。その近くでは宿根草の芽があちこちに出ている。あッ、あのあたりは確かフリルのついた綺麗な水仙が咲くんだっけ。木陰の隅では

ポッカリとまんきくが咲いている。オレンジ色に近い黄色で艶のある花びらが、輪を広げて笑っているようだ。

そうして私は、初々しい春の使者を楽しんでいたが、今度は、かぐわしい初夏やきらびやかな夏、うっとりする秋とそれぞれの草花も咲かせてみたくなった。そして家続きにある畑半分は、実用的な切り花から少しずつ少しずつ植えた。また、きれいな葉物や形のいい緑の植物、さらに香りのハーブなど植えていった。どれも気どらない草花だ。ハーブ等は花も咲かせるが華やかではない。でもお茶にすると美味しいし、ドライにして香り袋や石ケンなども作れたりする。なによりも草取りのとき香ってくるハーブには癒される。ということ

で、お気に入りのナチュラルガーデンになった。特に早朝は空気が澄んでいるので、庭全体にいい匂いがする。「白い」とは嗅覚を刺激するもの、「匂う」とは、「鼻に感ずる」ということらしい。私は花などの「香り」や土まで含め一体となった庭の「白い」を、いつもこの身に感じている。

今、私が沢山の花を植えている土地は、思えば夫の母が、唯一の趣味というか生きがいとして野

菜を作っていたところで、そのころ私達は、立派な野菜をあたり前のように頂いていたものだ。早朝五時前から鋤の音がしていた。

いつの頃からか私も、自分の食べる野菜を作ってみようと思った。それから花々の向う半分の畑の、草取りを始めた。それを見ていた近くのオバサンが、手伝うか、と来てくれた。実はそのオバサンこそ、母が生前私に、この畑をする時は、
「あの手に手伝わってもらえばいい」といつていたその人だった。お蔭で、ガーデン同様楽しい畑作りをしている。時々小昼を食べながら母の思い出話ができるのも嬉しい。

今年も畑は、年中食するジャガイモや大根、また夏野菜も含め、十分過ぎるほど育った。またいつからかこの畑に玉葱、赤玉葱、ニンニクも加わった。それは知人を訪ねた時、「あなたは作っていないよ、だから」とお土産にドッサリ玉葱を頂いたのがきっかけだった。「エ、玉葱も自分で作れるの？」というと、「簡単よ」と友人。私ビックリ、何故かショック！自分で作れるものと思っていなかった。知らなかったことが残念だったのか。早速、友人からの指南を受けて、今では自分と姉

とが一年中食べられるだけの量を作っている。それに玉葱は秋植えだから、畑も有効に使える。マルチをかけ、春に追肥をほどこすだけで、初夏の頃には、やったね！と、ほくそ笑みたくなるような収穫をする事ができる。

だが、庭や畑作りの楽しさや充実感は、生活に潤いを与えてくれるものの、一方では地味な草取りとの戦いでもある。他に用がある時や雨天続きには作業も進まないし、夏には特にも草は伸び放題。天候と体調を見極めながらの作業は思った以上にきつい。それなのに始めれば、二時間三時間と時を忘れたようにがん張る。毎日のように。むろん植物を良く育てたいからだが、夢中になって汗をかく。その時は日常の煩わしさやストレスもない、無我の境地になっている。草取りに心奪われていくうちに、結果的には、ほどよい疲れと達成感が残る。草取りも悪くないとポジティブに考えるようになった自分も、自然から教わった事である。

もう一つ、畑にいて楽しい事は珍客との出会いだ。いつだったか土の塊のようなガマ蛙がきて渋い声で鳴き、ビックリだった。ある時は飛び石の

間をスルスル通りぬけるカナ蛇、梅の木の下にはぬけがらもあった。蝶や幼虫、毛虫、蜘蛛など数えきれず。盛夏すぎた頃、かつこのいいカマキリと黄緑のたくさんの子供、久し振り、とじつくり観察する。今年が一番の珍客は貴婦人のようなセキレイ、細い足を伸ばし雨あがりのやわらかい黒土のあたりを口ばしでつつき餌を探している。平気で私の前を通り過ぎまた来る。飛びたたれないように私は息をのんで見守る。いい時間――。

庭や畑にいと元気になれる。暑さの折りは木陰で休み、湿気の少ない時は、張りきって草取りしよう。

そろそろ台所では新玉葱のマリネも作れそうだ。

おにぎりのぐちそうさん

目 澤 恵美子

ただひとすじに「料理は日本料理に限る」と、

その道を歩んでいる息子がいる。調理師になった次男である。

二十年以上も前の事であるが、そんな彼の勤める店に足を運んだ。仙台市内にある日本料理の老舗で、普段はたびたび入るような店ではなかったが、息子の様子も知りたいという気持ちもあり、その日、客となった。息子は元気に修業していた。仕事はきついながらもよい先輩に囲まれていることも知った。そしてテーブルに出された一品、一品を口にし、彼の望んだ日本料理の良さを堪能した。出された料理の中に、「手毬ずし」というのがあった。見るからに可愛らしい綺麗な小さいおにぎり。新鮮な鮭だねに包まれ丸く品よく整っていた。こんな可愛いもの作って。私はつぶやきながら、甘酸っぱい思いでそれを口にした。

この手毬ずしと一緒に、もう一つ思い出すおにぎりがある。次男が小学二〜三年の頃だったと思う。珍しく風邪をひいて寝こんだ私の傍に来て、「大丈夫……？」と、心配そうに顔をのぞきこんだ。「これ食べられる？」と、手元のお皿をそっと差し出した。そこにはピンポン玉を少し大きくしたくらいのもんまるいおにぎりがのっていた。こ

ろげ落ちそうなボールおにぎりだ。海苔をつけるのは大変だったろうと思いつつ、「潤君、作ってくれたの〜。うれしいなあ」と、本当は食欲もなはずの私なのに、手を伸ばした。ひと口、またひと口と少しずつ時間をかけて食べているうちに手にしたボールおにぎりは、胃の中に入っていた。ちよつと塩味がきいて、海苔は心配した通りボール型につきにくくボサボサとし……でもなんだか美味しい……。『美味しいね』というと、のぞきこむようにしていた彼の目がニコツと笑った。

だいたい『おにぎり』は、万人のものというか、どこでも手軽に美味しく食べられるので、たいいていの人が好きなのだと思う。それは、その場に必要に応じて用意された時であれ、また、思いがけずの場で持ち合わせた人から頂いた時でも、嬉しく助かるものだ。その結果、『空腹を満たす』だけでなく、何かほのぼの温かい気持ちになるから不思議である。

また、有事があった際の炊き出しは、一斉に分け合うことができる『おにぎり』が主流である。内陸に位置する私達の町では、このたびの東日本大震災において、被災地である沿岸へたくさんの

『おにぎり』を作って運んだ。私も地域の婦人ボランティアの協力をお願いして歩いた。おにぎり作りの現場では、栄養士さん調理師さんを中心に、たとえば赤十字の大学生、高校生のボランティア、各地区婦人の方に、その中には市長さんの奥さんも梅干持参で加わって下さったり、市民一体が一週間以上にわたって作った。そして毎日沿岸に運ばれて行くのを見送った。安全に届けられるように厳しいチェック体制で、緊張の毎日だった。苦境に立たされた方々の力になればという願いを込めたおにぎり作りだった。

さて我家でも久々に息子達が帰って来ると、この地方では昔から食べられているジンギスカンを独特の鉄鍋で焼いて食べるのが定番だが、そこにもよくおにぎりが登場する。肉派はそればかりに箸を運ぶが、ごはん派は肉はほどほど野菜とごはんをバランス良く食べる。おにぎりにはおくと、食べやすさもあって『美味しいねえ』と手が伸びる。息子達には、ジンギスカンやおにぎりは故郷の味かもしれない。

そんな食のたのしみや思い出は尽きないが、台所に立って時々思い出すのは、次男が幼児の頃好

きだったお弁当の歌である。「これくらいのお弁当箱に、おむすび小むすびサツと並べ、刻みしよугにゴマ振りかけて、ニンジンさん、ゴボウさん、筋の入ったフキ」手振り身振りでリズムよく歌っていた。食の楽しさを知らせるに十分の歌である。彼は朝の弁当作りの忙しい所に来て、「できたあ？　ゴボウ入ってるね！　今日は卵入ってないの、おにぎりの中は何かなあ」などとくいしん坊ぶりを発揮、「おむすび、小むすび並べましたよ！」という声に、ながめてみたり数えてみたり台所から離れなかった。料理している私の傍にいるのが好きなようだった。

昨年の春、幼い頃から「お父さんのように調理師になりたい」といっていた次男の娘がずっとその夢を温め続けて、それを実現し社会人となった。娘に「父が調理師を志した訳」を聞かれて、回答はこうだったという。

自分は子供の頃から、例えば父がラーメン食べたいなあというと、母はすぐ作って、父はそれを美味しそうに食べていた。自分たちも食べたんだけど、こんなのいいなあと思っていた。単純だけど普段のそんな風景を見ていたのがきっかけだっ

た、と。そういえば台所に来てフライパンをゆすってみたり、私の真似していたね！　だからポールおにぎりも……。食べさせたい相手があるから作るんだものね。ごちそうさん。